四　戦い後の城主、武将の動向

・岩倉城主織田信賢は慶長六年（一六〇一）、土佐藩主の山内一豊に迎えられ余生を送ったともされている。山内一豊の父盛豊は岩倉の家老で、黒田城の城主であったが岩倉城落城の時、討ち死にしたと伝わる。

・信安の家老の福田大膳正は、犬山の織田信清軍を五坊野に迎え奮戦したが、深手を負い、血刀を杖に五明にたどり着き、一軒の農家に転がり込んだ。農家の主人は事情を聞き、大膳の家族に知らせ介抱したが、その甲斐なく息を引き取った。家族は、家屋敷も焼き払われ帰るあてもなく、そのまま五明に地付いた。平成二十五年現在、五明の福田姓は四十三軒である。

・岩倉城の三奉行の一人の前野宗康は、岩倉落城後、在所である前野村の南窓庵に蟄居した。宗康には、雄吉、長康、勝長の三人の子があった。この前野家三兄弟は織豊期において、それぞれの立場で活躍している。また、三兄弟以外の一族の活躍は江南市史に詳しく記述されている。

・岩倉方の武者奉行、侍大将前田右馬允兼利（加賀藩主前田利家の叔父）と長男源介は浮野の戦いで討ち死にしている。丹羽玄塘の「尾張塘叢」に【織田伊勢守侍大将前田左馬（右馬）允戦死。丹羽郡花地村（古奈良地内花地ト天正ノ記アリ）打死場所郷西野ニアリ】とある。

なお、右馬允の三男續義は、江南市の安良の前田一族の元祖で、安良の前田姓は、江戸時代は二十七軒、平成二十五年現在は、四十九軒となっている。

・林弥七郎は一宮市浅野の住人で、信賢の家臣のうちで随一の弓の名手であったが、旧知の間柄である鉄砲の名手橋本一巴（信長の鉄砲指南役）と、弓矢と鉄砲で一騎打ちし、弥七郎は死亡、一巴は大怪我をしたと伝えられている。

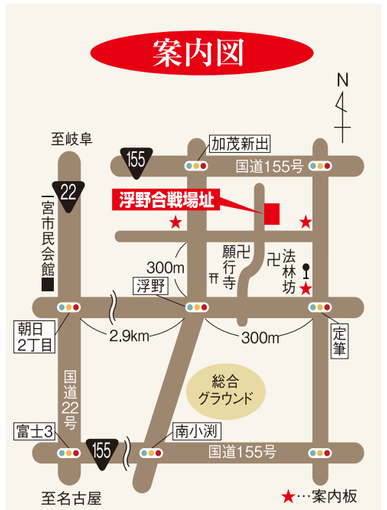
・犬山城主織田信清は浮野合戦、永禄四年の美濃侵攻に際して、信長に全面加勢しているが、その後、不和となり信長と敵対する。永禄七年（一五六四）八月（諸説有り）、信長は犬山城を攻略。信清は甲斐に逃れ、犬山鉄斎と号し、武田信玄のお伽衆となる。

五　民衆の生活とその動向

信長の岩倉方への攻撃は、浮野合戦の犠牲が大きかったためか、その後は戦闘らしい戦闘はせず、岩倉城を裸城にすると近辺の焼き打ちを行なった。かかる兵火によって焼失した寺院や民家の数はおびただしいものであった。それからの復興にあたっても信長の圧迫は厳しかった。一部は帰順して清須へ移った者もあったが、反骨的な有力者は他に離散した。岩倉城が落城したのは翌年の永禄二年である。

浮野合戦は、浮野・熊代・花地・勝栗・五明の一帯にわたった戦いで、浮野の戦い、天正の兵火により焼失した五坊野五ヶ寺は、その後、瑞仁寺は加茂に、徳法寺は勝栗に、浄蓮寺は塚本に、法林坊は浮野に、そして、圓光寺は中島郡神戸村に再興され、その後、野府城跡の現在地（一宮市開明）に移転し、五ヶ寺それぞれ現在に至っている。五ヶ寺の中の三ヶ寺は石山合戦に参陣している。また、徳法寺の南に削栗神社と五坊の由緒を記した碑「山神」があり、当時の歴史を伝えている。

住民の多くも家を焼かれ田畑を荒らされ困窮したことは想像できる。現在の集落は、その後に整備されたもので、往時を偲ぶ古井戸が各地で発掘され、工事や田畑の耕作などで陶弾や焼物が採集されることもあり、当時の丹羽郡千秋村立千秋北小学校では武具等が陳列されていた。浮野村庄屋原喜右衛門稲城は「浮野旧跡夢物語」等で浮野村のことについて詳細に伝えている。（新編一宮市史資料編十）



■永禄時代　丹羽郡稲木庄浮野ヶ原
■現在地　一宮市千秋町浮野字海道

千秋ふれあいバス（尾張一宮駅東側発着）
千秋北保育園バス停より徒歩5分

監修／浮野古戦場史跡保存会　発行／一宮市観光協会　2026年10月（5刷）

浮野合戦場址



浮野合戦場址碑文

永禄元年五月二十八日　二千余騎をひきいた織田信長は　岩倉城主織田伊勢守信安を攻撃のため浮野へ陣を進めた
この日は小競合いの瀬踏み程度に終ったが　つゞいて七月十二日犬山城主織田十郎左衛門が千騎ばかりを従えて馳せ加わったので総勢三千余騎が浮野を中心に争い　死闘二刻に及び首級九百余を討ち取った　これを浮野合戦と呼び　この首級を埋めた地（通称浮刕首塚）に建碑した

昭和三十九年春

一宮市長　伊藤　一


織田信長


尾張名所図会

鶯塚（通称 浮刕首塚）
この名称は、北方代官所調役丹羽玄塘の『尾張塘叢』の中の「浮野村古城　鶯ヶ池城址傍にあり　元三畝…」に由来する。

一　尾張の織田氏

応永の初め（一四〇〇年頃）、斯波義重が尾張の守護になった折、越前の織田常昌（常松）が守護代となった。常昌の子の伊勢守入道常勝（郷広）は稲沢市の下津に城を築いたが、東軍の織田敏定に守護所下津が攻められ焼亡。西軍織田敏広は国府宮に逃れた。その後、織田敏定は尾張守護所を清須に、織田敏広は岩倉に拠点を移した。清須は大和守を名乗り、岩倉は織田家の宗家で、代々伊勢守を名乗った。

二　織田家略系図



三　浮野合戦

清須城主織田信長は、永禄元年（一五五八）五月二十八日、岩倉城（城主織田信賢）攻略のため、二千余騎を率いて浮野に陣を進めたが、この日は小競り合い程度に終わった。その頃の岩倉城の警備は、西方下津の正眼寺に砦を構築し、岩倉市の北島の東にも砦を設けて清須方に備えられていた。清須と岩倉の距離は五キロメートル余りなのに、大きく迂回して浮野に布陣したのは、岩倉方の軍の配備と地形によるものである。当時の木曽川は、堤防もなく、濃尾平野を流れにまかせて分流し、武装した人馬の渡川は容易でなく、南方や西方からの攻撃は不利であった。

同年七月十二日、信長は、再び二千余騎を率い、足場の良い浮野に布陣した。犬山城主織田信賢は、信長に反旗をひるがえす。信長、岩倉へ進発、丹羽郡浮野に陣をとる。**7月12日、信長、再び浮野に陣をしき、犬山城主織田信清の助勢を得て約半日にわたる大激戦のすえ岩倉勢を撃破（浮野合戦）（信長25才）。**信長上洛、将軍足利義輝に拝謁。3月　信長、岩倉城の織田信賢を追放。ほぼ尾張を統一。5月　桶狭間の戦い。信長、今川義元を倒す。7月　信長、小牧山城に居城を移す。9月　信長、稲葉山城を落し、岐阜と改名。9月　本願寺顕如三好三人衆と通じ挙兵。1月　信長、安土城の築城を命ず。閏3月　本願寺顕如との和睦が成立（石山合戦の終結）。6月　本能寺の変。信長自刃（49才）　信忠自刃（26才）。11月　天正の大地震。6月　木曽川の大洪水。

浮野合戦関係略年表

年号	西暦	事項
応永年間	一四〇〇頃	この頃、斯波義重、尾張守護となる。
宝徳3年	一四五一	尾張守護代の織田敏広、父郷広と守護代職を争う。
応仁1年	一四六七	応仁の乱起こる。
文明10年	一四七八	斯波氏、義敏は東軍、義廉は西軍に属し対立。
11年	一四七九	東軍斯波氏の代官織田敏定、尾張に入国し清須城に入る。 1月　両織田氏和睦。清須城の織田氏は下郡（海西・海東・知多・愛知郡）を、岩倉城の織田氏は上郡（葉栗・丹羽・中島・春日井郡）を統治、尾張の分割支配はじまる。
天文3年	一五三四	清須城の敏定を織田敏広・斎藤妙椿が包囲攻撃（清須城攻防戦）。 5月　信長、生誕（勝幡城）。父は清須方重臣織田信秀。
6年	一五三七	2月　豊臣秀吉、生誕（中村公園）。
11年	一五四二	12月　徳川家康、生誕（岡崎城）。
12年	一五四三	8月　ポルトガル人、種子島に漂着し鉄砲を伝える。
17年	一五四八	信秀、斎藤道三と和睦。のち道三の娘、信長に嫁ぐ。
18年	一五四九	7月　ザビエル、キリスト教を伝える。
21年	一五五二	この頃、信秀病没、信長家督を嗣ぐ（信長18才）。
22年	一五五三	閏1月　平手政秀、信長の素行を諫め切腹。
23年	一五五四	4月　信長、道三と尾張富田の聖徳寺で会見。
弘治1年	一五五五	1月　信長、二百挺の鉄砲で村木砦を攻略（東浦町）。 4月　信長、叔父信光と謀り守護代織田彦五郎を殺害、清須城を奪う。
2年	一五五六	4月　道三、子の義龍と長良川畔で戦い敗死。
3年	一五五七	8月　稲生原の戦い。（名古屋市西区）
		11月　信勝（信行）を清須城に誘殺する。
永禄1年	一五五八	**5月　岩倉城主織田信賢、信長に反旗をひるがえす。信長、岩倉へ進発、丹羽郡浮野に陣をとる。7月12日、信長、再び浮野に陣をしき、犬山城主織田信清の助勢を得て約半日にわたる大激戦のすえ岩倉勢を撃破（浮野合戦）（信長25才）。**
2年	一五五九	2月　信長上洛、将軍足利義輝に拝謁。
		3月　信長、岩倉城の織田信賢を追放。ほぼ尾張を統一。
3年	一五六〇	5月　桶狭間の戦い。信長、今川義元を倒す。
6年	一五六三	7月　信長、小牧山城に居城を移す。
10年	一五六七	9月　信長、稲葉山城を落し、岐阜と改名。
元亀1年	一五七〇	9月　本願寺顕如三好三人衆と通じ挙兵。
天正4年	一五七六	1月　信長、安土城の築城を命ず。
8年	一五八〇	閏3月　本願寺顕如との和睦が成立（石山合戦の終結）。
10年	一五八二	6月　本能寺の変。信長自刃（49才）　信忠自刃（26才）。
13年	一五八五	11月　天正の大地震。
14年	一五八六	6月　木曽川の大洪水。